

**がん治療と仕事の
両立支援セミナー**

第19回図書館総合展
がんによる離職は、図書館がくい止める

働き続けるためにできること

報告書

NPO法人キャンサーリボンズ

2017年12月

実施概要

本セミナーは、がん治療と仕事の両立に関する理解促進を目的として、MSD株式会社、NPO法人キャンサーリボンズが共同で企画・実施しました。

■名 称 がん治療と仕事の両立支援セミナー
第19回図書館総合展
「働き続けるためにできること」～がんによる離職は、図書館がくい止める～

■日 時 2017年11月8日(水) 10:15～12:15

■会 場 パシフィコ横浜 展示ホールD (第19回図書館総合展 開場内特設)

■参加者数 【 136名 】

<参加者内訳>

一般(患者さん・ご家族、企業(後援団体含む)など)	120名
講師、パネリスト	7名
メディア1社(読売新聞社)	1名
主催者 (MSD株式会社様 2名、キャンサーリボンズ 6名)	8名

キャンサーリボンズの誘致により、当日、読売新聞の取材が入りました。12月21日(火)読売新聞(朝刊)ウーマン面「乳がん治療と仕事の両立」企業支援特集記事の中で、登壇者 菅原みゆきさん(社会保険労務士)の講演内容の一部が掲載されました。(P6参照)



■主 催 NPO法人キャンサーリボンズ、MSD株式会社

■後 援 神奈川県、神奈川県商工会議所連合会、公益財団法人神奈川産業振興センター、神奈川県社会保険労務士会、一般社団法人日本産業カウンセラー協会東京支部、一般社団法人日本産業カウンセラー協会神奈川支部

実施概要

(一部敬称略)

<プログラム>

■開会挨拶

鳥取県立図書館 支援協力課 課長、NPO法人キャンサーリボンズ委員 小林 隆志

「がん治療と仕事の両立支援セミナー」を昨年共催した鳥取県立図書館の支援協力課課長でN P O法人キャンサーリボンズ委員 小林隆志さんより開会挨拶がありました。



■主催者挨拶

MSD株式会社 医薬政策部門 公共・産業政策グループ 課長 片岡 和真

続いて、MSD株式会社 医薬政策部門 公共・産業政策グループ
課長 片岡和真さんより挨拶がありました。



【社会保険労務士による講演】

■「がん治療と仕事の両立支援」をめぐる国の施策と、知っておきたい制度

みゆき社労士事務所 代表 菅原みゆき

仕事と治療の両立に関する国の施策や、社会保障制度を中心にご講演
いただきました。



がん対策基本法などの施策や、社会保険労務士による両立支援（勤務、休暇に関する法律や制度）、両立のために知っておきたい制度、神奈川県内の社労士相談を実施しているがん診療連携拠点病院の紹介がありました。

両立のために知っておきたい制度として‘傷病手当金’の連続する3日を含み4日以上仕事につけない‘待期3日間’の支給条件についてもご説明いただきました。

実施概要

(一部敬称略)

【医師による講演】

■がん治療と仕事の両立を可能にする、がん医療最新事情

厚生中央病院 総合内科部長(腫瘍内科)部長 横山 智央
NPO法人キャンサーリボンズ委員



がん治療のガイドラインの紹介、仕事と治療の両立に関する医療情報（副作用発現時期の目安、外来通院治療など）についてご講演いただきました。

情報の信頼性という点で図書館でも論議される「がん補完代替療法」についても紹介があり、学会およびガイドラインが紹介されました

また、緩和ケアの重要性についても触れ、早期緩和ケアを併用することで辛い痛みによる精神症状が改善される、と説明がありました。

【パネルディスカッション】

■がん治療と仕事の両立をめぐる当事者・職場の体験談から、図書館の役割を考える

パネリスト

西口洋平(一般社団法人キャンサーペアレンツ 代表理事)
白水千穂(社会福祉法人愛成会 法人企画事業部 課長)
小林瑞恵(社会福祉法人愛成会 副理事長)
横山 智央(厚生中央病院 総合内科部長(腫瘍内科)部長
NPO法人キャンサーリボンズ委員)
菅原みゆき(みゆき社労士事務所代表)

コーディネーター

岡山慶子(NPO法人キャンサーリボンズ 副理事長)
小林隆志(鳥取県立図書館 図書館支援協力課 課長、
NPO法人キャンサーリボンズ委員)



パネリスト 小林隆志さんから、

「図書館は一人ひとりの生活の幸せに貢献することが最大の使命。様々な課題を抱えて情報を求めてくる利用者の頼りになり得るか、が大事だと考えている。

がん患者さんを支える社会の仕組みは既に社会にあるが、医療者等に「図書館は頼りになる組織」と思ってもらえるか、また、仕組みの輪の中に入れてももらえるか。がん治療中の方が仕事を辞めなければならない状況の時、図書館は何ができるか、という視点で進行したい」とアナウンスがありディスカッションがスタートしました。

実施概要

■体験者としての図書館の活用、がん情報の収集など

「がんと仕事がつながった情報」がなく困った（西口さん）

35歳で胆管がんと診断された西口さんは、3ヶ月の休職後に復帰。

制度に精通した人事部長の尽力でスムーズに復職したが、当時は「がんと仕事がつながった情報」がなく困った経験がある。

「図書館には一度だけ行ったが、探していた胆管がんの本は無かった。」



リワークまでの居場所として、図書館を活用。がん情報は病気が楽になって手に取った（白水さん）

40歳でがんと診断され、退職した白水さんは、闘病しながら就職活動をした一年間、図書館に日参した。

「家にいるうつになりそうで、大好きな本を読むために、また気分転換も兼ね日中の居場所として図書館を利用した。

「病気のことを忘れるために図書館を利用していたので、がんに関する情報は見ないようにしていたが、病気が少し楽になってから、がん情報に近づけるようになり、医療情報や闘病記を読んだ。」

■がん治療と仕事の両立の体験について

「がん」のことを皆が知らないことが大変だった（西口さん）

「がんになるまで、「がん」の病気について知らなかつた。がんになつたら、死ぬ、と思っていた。がんの事を知らない者同士で話をしなければならず大変だった。その経験を活かして、現在は人事部で働いている。」

副作用により、復職に対するモチベーションが下がった（白水さん）

「抗がん剤治療の副作用が始まつてからは、復職できるのか、してもいいのか、と悩んだ。」

採用者として、「がんであるかどうかは問題ではなかつた」（小林瑞恵さん）

「白水さんの傷病手当が切れる時に就職を探していることを知り、即採用した。経営者としては、求人枠と本人の希望がマッチすればよいことで、がんであるかどうかは問題ではなかつた。」

■図書館での「がん情報」の発信について

図書館が情報を準備すること、蔵書や情報があることのPRも大事（小林隆志さん）

「知りたい情報・必要な情報は、治療が進めば変わる。利用者が求める必要な情報が揃っている図書館があれば患者さんの役に立つはず。鳥取県立図書館は、そういう考え方で資料購入費に相当お金をかけている。本を揃えておくだけでなく、情報があることを地域利用者に知つてもらう努力も必要。」

書架の位置に配慮することから始めてみては（横山さん）

「都内の自宅そばの図書館に行ってみたが、情報が古く(15年前)棚の位置も最下段で本も整理されていなかつた。患者さんによつては腕を上げにくい方や身体を動かすのが辛い方もいるので、手にとりやすい高さの棚に関連情報を配架して欲しい。」

必要な、正しい情報を届けるのが図書館（小林瑞恵さん）

「必要な、正しい情報を届けるのが図書館。インターネットは真実ではない情報も広告もついてくる。正しい情報へのアクセスを行つてくれる人が必要、それが図書館。地域とつながる機能もある。」

実施概要

■図書館にできること

「今はがんと共に生きる時代。人が集まる場所として大きな可能性がある。」(西口さん)

「どこにでもある図書館。元気がない時は現実逃避ができる、元気な時は医療情報を収集できる場所。棲み分けができる居場所。」(白水さん)



「がんに理解がない人が多い。患者以外の人たちにアクセスして、がんの情報を広めることができるのが図書館。」(菅原さん)

パネリスト 小林隆志さんは、

「今日のセミナーは、図書館にがん治療のことを知って欲しいということでなく、がんの本がどこにあり、連携できる社労士さん等がどこにいるかを分かっていて、案内できるように準備しておくことが大事だということ。啓発の様々な仕組みを作り、理解を進めることが大切。

図書館以外の方はこれをきっかけに図書館に行ってほしい、これをきっかけに関心を持って」と締めくくりました。

